

ラオスの こども通信



63号
2015年4月発行

発行：(認定)特定非営利活動法人 ラオスのこども

- 子どもセンターが、可能性を広げていく。▶P.1
- はじめる・つながる・つくりだす [2014.12-2015.2]
ラオス発 ▶P.2 日本発 ▶P.3
- みんなでボランティア ▶P.4
- 勉強会報告 ▶P.4
- メコンのほとり「儀」 ▶P.4



写真の説明はp.4をごらんください。

子どもセンターが、可能性を広げていく。

子どもセンターは、日本の児童館に相当する施設です。子どもたちが魅力を感じて訪れるように、活動の幅を広げるのは大切な仕事。研修で棒人形劇をマスターしました。さらに、自ら活動資金の調達ができるようになるための申請書の書き方も学びました。

人形をつくり、シナリオをつくって実演

2015年1月14日～19日、子どもセンター11か所の館長・職員など計23人が首都ヴィエンチャンに集い、「子どものための活動能力育成セミナー」を行いました。

ラオスも他の国と同様、ゲーム機や携帯機器などが普及し、子どもたちの興味がそこに引きつけられています。そんな環境の中、子どもセンターとしては、みんなで力を合わせて一つのことをやり遂げること、お互いに自分の得意なことを教えあうこと、などを活動の目標とし、それができそうな活動内容を求めています。

そこで、研修では、人形を身近な素材で各自が思い思いに手作りし、初めて知り合った同士でグループになってシナリオを作って演じるというプログラムを実施しました。参加者は、「自然のものを使う人形作りはとてもよい」(ルアンパバン子どもセンター、ヌカムさん)。「人形劇づくりを子どもたちとするのが楽しみ」(ポリカムサイ子どもセンター、カンホムさん)と語ります。

講師は日本の保育園で豊富な経験を持つ西村恵子さんと後藤さち子さんをお願いし、「お話作りはとても盛り上がった。協力し合って進めるということ、子どもたちとの活動で活かしてもらえたら」(西村さん)、「参加者は人形の素材を持参するなど意欲的で、若手が光っていた。次回は彼らのアイデアを積極的に取り入れてみては」(後藤さん)とのことでした。



素材を持ち寄って、棒人形をつくる

熱い議論が交わされて

各センターで実施している活動を紹介し共有する研修では、病気の様子をジェスチャーで表現する「罰ゲーム」が披露されると、「その病気に罹っている子どもへの配慮が足りない」という指摘も出れば、「いや、そういう病気があることを知る機会ともなる」という意見も出て、活発に議論が交わされました。従来、ややもすると、目上の意見を聞き、反論しないという文化が色濃かった印象を持つ日本人スタッフには新鮮に映った場面でした。

活動資金を集めるための申請書の書き方

子どもセンターが活動する上で欠かせないのが資金の確保です。各センターは県や郡の教育スポーツ局や情報文化局の管轄にありますが、活動費の予算配分はほとんどありません。資金不足が悩みの種で、当会などが支援をしています。そこで、各センターが自ら資金調達ができるように、当会スタッフのスックパンサーが講師を務めました。実際に、財団や支援団体に提出する申請書を作り、実践的に取り組みました。子どもセンターのさらなる発展に向けて、当会ではタイムリーな支援をしていきます。

(ラオス事務所スタッフ、森透／理事)

支援：ゆうちょ財団ボランティア貯金 NGO 海外援助活動助成事業



資金調達の技術を実践的に学ぶ

ラオス 発

ラオス事務所発のプロジェクトが動く

かつて、プロジェクトといえば、日本で企画し、日本で支援を得て、ラオスに送るというものでした。しかし近年ラオスで、NGOを支援する企業や、自社の社会貢献事業をNGOに委託する企業などが徐々に現れてきています。当会



移転した地域に図書館ができた

は、かねてよりラオス事務所の自立化を目標に掲げています。

その一つが、2014年に実施した、THPC(トゥン・ヒンブン電力会社)の支援による学校図書室2か所の開設です。これは、移転によって新しく生まれた村を整備する中でのサービスです。同社のケオダヴォン教育開発コーディネーターからは、「図書室運営の豊富な経験と子どもたちの読書意欲を引き出すノウハウが充実している」と評価を得ています。

そして2013年から実施しているのがタイのSCG(サイアム・セメント・グループ)による高校生への奨学金プログラムの受託事業です。奨学金と当会の柱の事業である読書推進活動は異なるプロジェクトですが、深く関連づいています。奨学生の選出は、学ぶ意欲と学費の必要度の高さを見極め、支給したお金が適切に使われなければなりません。当会が読書推進活動を通してラオス全国をまわり、それぞれの教育行政と太いパイプを持つことが、大きなプラスとなっています。同時に、200人に上る奨学生を選出するために、生徒からの聞き取りを行っています。それによって、当会が地域をより理解する手掛かりとなっています。

「ラオスやタイの地場の大手企業に、当会の読書推進活動を知ってもらいたい機会」とラオス事務所スタッフはとらえています。

また、スイス政府系機関からの支援で、多様な民族の若手作家を育成する研修が行われたことは、『ラオスのこども通信』62号でお伝えしました。これを受け、現在、作品の出版に到達するために、資金の協力をみなさんにお願いしているところです(同封チラシをご参照ください)。

当会としては、ラオス事務所の自立への道程であるとともに、適切な事業運営と説明責任を果たすことのできる業務に努めていくことの重要性を認識しているところです。

(ラオス事務所スタッフ、森透/理事)



聞き取りをして、奨学生を選ぶ

15年におよぶ絵本・紙芝居出版、そして学校図書室開設へ

2月10日～11日、チャムパサック県パクセー郡のボンサイ中学校に沖電気工業(株)「OKI愛の100円募金」のご支援で図書室がオープンしました。生徒数約2,000人と大規模にも関わらず図書室がなく、先生から希望があった学校です。念願の図書室にみんな本当にうれしそうです。

沖電気工業(株)の皆さんは15年にわたり、「出版支援」や「絵本づくりイベント」で作った絵本を子ども達へ届けてきました。継続的な活動には、「絵本1冊の効果は1ではなく、読みつがれることで10にも20にもなる」という思いが込められています。

留学生のトゥミーさんは「小さい頃、本が好きで図書室に通っていました。あの頃よく読んでいた絵本は、日本の皆さんが届けてくれていたんですね」と懐かしみながら、感慨深げに語っていました。みんなの心に残る本が、そして楽しい絵本をワクワクしながら探す、そんな図書室をこれからも届けられたら素敵です。

(尾澤美春/東京事務所)



念願の図書室がオープン

<出版プロジェクト>

紙芝居『森のおばけと汚い水』

作: プンルート シヴィサイ

部数: 2,000部

支援: 公益信託アドラ国際援助基金(800部は自己資金で印刷)

2004年に当会が出版した保健衛生シリーズの中から、特に評判の高い、飲み水をテーマにした紙芝居を再版しました。

ある日、水牛に乗って遊びに出かけた男の子が、水溜りの水を飲んでおなかをこわしてしまいます。両親は、森のおばけのせいだと思い、お供えやお祈りをしますがよくなりません。結局、病院に行って治療してもらい、そして、水は煮沸してから飲むようにすると良いことを知ります。

地方の山間部では水道や井戸などがあまり普及しておらず、衛生的な水にアクセスできない地域が少なくありません。煮沸せずに水を飲んで病気になるという事例は、最近でも子ども達からよく出てくる話だと現地スタッフは言います。



この紙芝居は、子どもが主人公の物語で親しみやすくなっており、紙芝居を楽しむうちに、受け手である子ども自身が、自分の身を守ることを学べるようになっています。

日本 発

事務所のお仕事 プロジェクトを円滑に進め、 未来に向けて呼びかける

「事務所って、何をしているの?」と、よく聞かれます。

例えば、図書室を開設する場合、ラオス事務所に届く各地からの要望の中から、どこを優先するか、受入体制が整っているかなど教育局や校長と協議します。一方、東京事務所は、個人、財団、企業などに支援のお願いをし、お金が集まったら、現地との細かなスケジュール調整をします。また、開設後は図書室が継続して活動できるようにフォローし、併せて支援者への報告をおこないます。このように、事務所はプロジェクトを円滑に進めるうえで不可欠な役割を担っています。そうした、日々の業務を支えるのが会員によるサポートです。

同時に、事務局は、当会が掲げる「子どもは未来をつかみたい」に向かって前進するために何をすべきかを方向付ける役割を持っています。NGOはまだだれも手掛けていないことに挑むことに使命感を持ち、会員から寄せられる会費は、それを支える糧です。どうぞ、未来に向けた「ラオスの子ども」の活動を支援する会員となってください。

ピーマイパーティ2015に向けて

来る4月25日、今年もラオスのお正月を祝う、ピーマイパーティを開催します。みんなで楽しみながらラオスについて知ることができるように準備を進めています。

チラシの作成やインターネットページへの書き込みなど広報活動を行いながら、パーティープログラムについてスタッフやボランティアの方々と一緒に考案してきました。去年に引き続き、ラオス語絵本作り体験、パーシー儀式体験などに加えて、ラオスの文化や食に触れることができる楽しいプログラムを盛りだくさん用意しています。多くの方のご参加お待ちしております!

(岸朋美/インターン)



ピーマイパーティでのパーシー

ラオス支援団体交流会を開催

2014年12月13日、早稲田大学で、ラオスを支援する学生団体とNGO、計8団体が集い交流する会を開催しました。学生団体スーンとの図書共同プロジェクトの経験から、学生団体とNGOには、それぞれに強みがあると考えています。しかし、団体同士が交流する場はなかなかありません。そこで、互いに情報・意見交換をし、ノウハウの獲得・チャンネル作りの機会を作ることを目的としました。

当日は各団体紹介の後、「支援内容」「団体運営」「ラオスならではの」の3つのテーマに分かれて、座談会形式で、互いに抱えている悩みやそれに対する意見・アドバイスを話し合いました。参加者からは「このように同じ国を支援する団体が集まる機会は貴重なので参考になった」という

声や、連絡先を交換する様子を見ることができ、目的を達成することができたと嬉しく思います。

(飯川桃子/インターン)



ラオスでの取り組みを語り合う学生とNGOスタッフ

六本木で谷中で織物展、ピーマイで多数ご用意!

2014年12月5~7日は六本木INAで「ぬくもりショール展」、2015年1月20日~2月1日は谷中ザ・エスノース・ギャラリーで「ぬくもり伝わるラオスの手仕事展」を開催。チャントソン講演会では、アンティークの布を手に取り、民族の特徴を紹介し、「織物はラ



「織物は誇り」と語るチャントソン代表

オス文化の誇り。技術を守り、伝承していきたい。少数民族の伝統や暮らしをどう守っていくか、今後の課題」と呼びかけました。

ピーマイパーティでも、ラオス製品を販売します。お楽しみに。

団体・企業からの指定プロジェクトの進行状況

◆株式会社ファンケル

「フェアトレードフーズ」寄付金による当会ラオス事務所併設図書館の運営支援。

◆キヤノン株式会社

「チャリティブックフェア2014」収益金のご寄付による「折り紙ワークショップ」支援の調整中。

◆学習院女子大学

ラオスのカレン族の民話絵本『Aiy Tuek Kuek』(The giant man)の出版。原稿チェック、挿絵作成中。

◆公益財団法人ベルマーク教育助成財団

学校図書館開設プロジェクト。既設図書室のフォローアップとして図書セット配付中。

◆株式会社すかいらく

子ども向けラオス語図書5作品の出版。再版3作品の印刷中、新作2作品の原稿準備中。

※敬称略・事業開始順。これらは記事掲載以外のプロジェクトです。

個人のみなさまからいただいたご寄付は別紙に記載していますので、ご覧ください。

みんなでボランティア

多くのラオス人に出会い、共感

米森良輔さん(サポーター会員)

知人に、「ラオスは良い所だよ」と勧められ、興味を持ちました。

その翌年の2014年、ラオスの地を踏み、北はムアンシンから南はシーパンドンまで動き回りました。またラオス語を勉強したり、「ラオスのこども」のピーマイパーティや駐在員報告会に参加し、その後偶然、本多駐在員に空港でお会いして、ヴィエンチャン事務所で一週間ほどボランティア致しました。働いている時でもラオス人は笑顔で、ご飯ばかり気にしているのが印象に残っています。

村で過ごす時、結婚式や飲み会に誘ってもらったり、人の優しさに触れる事が多々あります。反面、急斜面で栽培した米・野菜の搬送の力仕事に汗をかき、夜に外で水シャワーを浴びて風邪引いたり、懐中電灯を持って外にトイレに行ったりと身近な問題を肌で感じることもありました。

他国企業の参入や開発により急速な変化を求められているようにも思います。多くのラオス人に出会い共感した中で、少しでも何か自分なりに還元出来ないかと考えています。



「勉強会」報告

第21回「山のいたずらっ子たちのあそびとしごとと学校～ラオス北部のアカ族の暮らしに学ぶ」

(2015年2月21日 ライフコミュニティ西馬込)

ラオスのこども元スタッフの秋元波さんを講師にむかえ、ラオス北部、アカ族の村の子どもの生活や学校の様子を、映像を用いて楽しく学びました。

ラオスは多数の言語がつかわれている社会ですが、学校ではラオス語(ラオ語)のみで授業をすることが決められています。アカ族の子供たちは、小学校に入学すると母語ではないラオス語で学ばなければなりません(これが落第してしまう原因のひとつ)。

授業を終え、学校を出ると、ラオ族出身の先生にとって逆転現象が起こります。聞こえてくるのはアカ語のみ。村に住み込んでいるので、「一生活者」として不慣れなアカ語を使って村人とコミュニケーションを取らなければなりません。ときに村人や子どもたちからアカ語を教わる「生徒」となり、相互扶助の関係がそこに展開していくのです。



手で、反対側の耳がつかめれば、小学校に入学です。

メコンのほとり儀

「パーシー」とは？ 日本でも体験できます。4/25(土) ピーマイパーティで

誕生、結婚、就職、出家、歓迎、病気の治癒、葬式など人生の節目に催される儀式で、主にラオ族が行います。もとは悪行を親に謝るために行った儀式だったともいわれています。

パーシーを行うには、「パークワン」といわれるお膳を用意し、バナナの葉を円錐状に編んだものに、ロウソクで作った飾りや木綿糸を巻いた竹ひご、花などを刺し、豚・鶏の丸焼き、米、果実や卵、菓子などが添えられます。

パーシーには親族や友人、近所の人などが参加し、祈祷師による祝詞があげられ、主役(例えば結婚式なら新郎新婦)の手首にお膳にあった木綿糸を結び

表紙の写真

多民族国家ラオスには多様な言語や文化が息づいています。北部に暮らすアカ族の村の表と裏には鳥居のような木造の門があります。精霊が間違えて村の中に迷い込んで来ないように人間の縄張りを示すために、毎年新しい門を建てます。写真の門は村に続く道の脇にあり、村の入り口にはもう一つ表門がありました。村に暮らすラオ族の先生は子どもや近所の人たちからアカ語を教わり、お年寄りには先生たちとおしゃべりをするうちに片言のラオ語を覚えおしゃべりしていました。(撮影:ルアンナムター県にて、ボランティア・秋元波)

特定非営利活動法人 ラオスのこどもの目的は、子どもたちが自らの力を伸ばし、人生を主体的に選択でき、公正で平和な地球社会づくりに貢献することです。教育が十分に普及していない地域のひとつラオスで活動し、ラオスと日本をはじめ子ども、人々の参加を通じて、だれもが成長の機会を得ることをめざします。

ラオスのこども通信 63号

2015年4月発行 編集人: 森 透
発行: Action with Lao Children / Deknolao
(認定) 特定非営利活動法人 ラオスのこども
〒143-0025 東京都大田区南馬込6-29-12 ミキハイツ303
TEL/FAX 03-3755-1603
e-mail: deknolao@yahoo.co.jp
http://deknolao.org
都営地下鉄浅草線 西馬込 南口下車 徒歩7分
郵便振替 00140-6-462494

これからの予定 2015年4月～6月

2015年も活動ミーティングを奇数月、勉強会を偶数月、それぞれ第3土曜日に開催します(一部異なる日もあります)。

<活動ミーティング>

現地報告、国内イベントの打ち合わせ、会の運営の意見交換などを行います。
5/16(土)

<勉強会>

6/20(土)

*内容は企画調整中です。日程とも変更になる場合があります。内容や会場とあわせ、詳細はホームページでお知らせします。みなさんの参加お待ちしています。

<イベントスケジュール>

・4/25(土)

ラオスのお正月 サバイディピーマイ・パーティ2015

・5/23(土) 24(日)

第5回ラオスフェスティバル2015

※詳細は別紙をご覧ください。



ラオスでのパーシー



卵を手に乗せる

付けていきます。これはラオスでは32個あるとされている魂が飛んで行ってしまわないようにするため、健康や幸せ、繁栄などを祈りながら結んでいきます。主役に続いて、参加者同士もお互いの手首に結びあい、この糸は3日間はずしてはいけないと言われています。はずす際は、ハサミを使わずにほどかなければなりません。

なお、通常は「パークワン」は一つ用意しますが、結婚式では男女それぞれの分として大小二つとします。これはふたつの魂を結ぶためだそうです。